

大隅半島より出土の蔵骨器 3 例

池 畑 耕 一 ・ 中 村 耕 治

1 はじめに

県内出土の蔵骨器は新東晃一氏によって、昭和51年にまとめられ、出土例は30遺跡36例に及ぶ。^①その後、加世田市加治屋遺跡^②、菱刈町山下遺跡^③などで発掘調査によって出土が知られている。

県教育委員会文化課では昭和47年より大隅地区埋蔵文化財分布調査を実施しており、昭和58年度も5月から7月にかけて曾於都を中心として行なった。調査は地表散布状況の把握を主としたが、同時に公民館や小・中学校に保管されている遺物の調査も実施した。ここに紹介する資料もその際にふれたものである。本資料の一部はすでに紹介した^④が、ページ数の都合で概略しか記してなく、また焼骨の調査結果も記してないため、ここに改めて紹介するものである。

特に、これまで本県では古代の人骨の分析がされたことはなく、別稿にあるようにその分析成果が発表されたことは今後こうした調査の糸口となろう。

2 黒田B遺跡（曾於郡財部町下財部字黒田3907番地）出土の蔵骨器

(1) 位置および発見の経緯

財部町は鹿児島県の北東端にあり、宮崎県と境を接する。黒田B遺跡は財部町の北端部にあり、宮崎県都城市との境近くにある。遺跡は南へゆるやかに下降傾斜する台地の先端部にあって、標高は約240mである。台地基部や先端部は山林であるが、中央部はほぼ平坦な畑地となっている。同台地上には黒田A遺跡があり、ここにも土師器が散布している。同じ頃の遺跡であろうと思われる。

発見されたのは昭和54年7月1日である。台地の一角に住まれる牧野実夫氏が、牛に牽を引かせて耕作中に引っかけたという。氏は周辺を掘り下げてこれを取りあげた。下層は全くの無傷であるが、上蓋の一部が欠けている。この欠損部がその時の傷であろう。すなわち、この割れ方から推測すると、これらはまっすぐ座った状態に置かれていたと思われ、牧野氏の観察でもそうだったようである。

なお、牧野氏に「周辺に炭などがなかったか」尋ねたが、「なにもなかった。」との答を得た。木炭かあるいは石囲いなどの施設はな



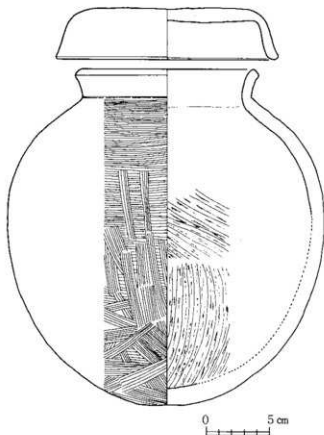
黒田B遺跡の位置

かったものと思われる。この資料は人骨のあったことなどから再埋葬の話もあったらしいが、子息によって財部町中央公民館に持ち込まれ、民俗資料の中にうずもれていた。5月16日に中央公民館を訪れた筆者らにより古代の蔵骨器であることが判明した。

(2) 蔵骨器の形態

蔵骨器は土師質の蓋と身から成っている。

蓋は口縁直径が17cm～17.6cmとややいびつであり、高さは4cmである。天井部切り離しは時計まわりのへら切り離しで、割合に平坦である。天井部内側は立ちあがりとの境にはっきりした段をもつ。口縁へ向かって外側へ広がっており、端部は外へやや屈曲するため、内面に稜をもつ。内面にはヘラナデ痕がみられ、外面はやや摩耗している。色調はあわい茶褐色をしているが、外面の一部は赤みがかったり、青灰色を呈している。焼成



黒田B遺跡出土の蔵骨器

度は良好である。石英・白色石粒・黒雲母などを多く含む細砂質の胎土を用いているが、時に7mm大までの小石粒を含むため、一部分に亀裂がみられる。

身は口縁直径が13.5cm、高さ26.9cmの丸底の甕である。口縁の立ちあがりは短く、外へ開いている。端部断面は方形を呈するが、ややくぼんでいる。最大直径は胴部中央あたりにあって、直径25cmを測る。口縁部は胴部とのちに接合されている。整形は外面が、口縁部のへら横ナデを除いて、ハケナデであるが、上半部が横方向、下半部が縦あるいは斜方向である。中央付近は重なっており、横方向を先にして縦方向はあとである。内面は、縦方向あるいは斜方向のへらケズリであるが、肩部付近はそのあと横方向のへらナデが施される。口縁部内面は横方向のへらナデである。色調は淡黄茶褐色を呈しているが、部分的には赤茶褐色、青灰色を呈する。内面下部は焼骨がはいっていた

ために黒色あるいは骨粉状のものが付着している。外面下半部には炭が付着している。焼成度は良好である。胎土は石英・角閃石・茶色粘土などを多く含む砂質土を用い、3mm大の小石も含まれているが、割合にこまかい。

蓋と身は大きさがぴったりとあい、同時に作られた感じもする。

3 小平遺跡（曾於郡末吉町南之郷字小平）出土の蔵骨器

(1) 位置および発見の経緯

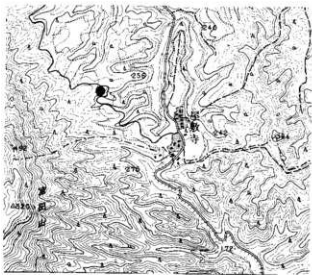
末吉町は鹿児島県の東端部にあって宮崎県都城市南部と境を接している。本遺跡のある屋敷寺地区は末吉町の南端部に位置し、松山町および志布志町との境界付近にある。標高520mの宮田山を最高峰とする山地の中に狭い尾根状の平地があり、この南端付近にある。北側へおりる谷から流れ出す小川は大淀川へ注ぎ、南側へおりる谷の水流は尾野見川の支流である小河川へ注いでいる。すなわち、この山地は南北に分ける分水嶺の地にあたる。東側にある屋敷寺遺跡からは弥生式土器とともに打製石斧も採集されている。

本資料の発見された年月日は定かでないが、発見者の水流正信・幹夫氏親子の話によれば約30年ほど前であったという。両氏が自分の畑を耕作中に畝に引っかけたものである。周辺に木炭が多くあったということから、周辺を炭で囲んでいた可能性がある。また、蓋はなかったといわれるが、それ以前に石などが多く出て畑の脇に置いたといわれるので、あるいはこの中のあるものが蓋だったかもしれない。

これは南之郷中学校に保管されていたが、昭和31年に大隅町八合原遺跡の調査を同志社大学が実施した際に図化され、同年11月に石部正志氏によって屋敷寺出土の蔵骨器として『古代学研究』に紹介されている。^⑤ また、昭和36年に

県下一円遺跡所在調査が行われた際のカードにも写真とともに紹介されているが、この時に出土地を篠ヶ追と間違えて記されたために昭和36年の「鹿児島遺跡地名表」以降の地名表や遺跡地図、あるいは引用する文献でも篠ヶ追出土とされてきた。^⑥

筆者らは大隅地区埋蔵文化財分布調査中の6月16日に南之郷中学校へ立ち寄り、その収蔵遺物を調査した。その際、この須恵器壺を借用し実測図を作成した。2月27日には池畑がその出土地を調査するために屋敷寺へ行き、さいわい発見者の水流正信・幹夫両氏



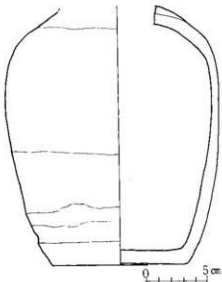
小平遺跡の位置

から発見時の様子を聞くことができた。それは先に記したようであった。そして、出土地も従来いわれてきた篠ヶ迫ではなく小字を小平という地であった。ここは屋敷寺の集落から西側へ谷をふたつ渡った所で北東へ向かってのびる狭い舌状台地上にある。この畑は近年地下げし一枚の畑と化している。出土地点はこの畑の西端部で、山林との境付近であったという。表面調査をしたが、現在では一点も採集できなかった。すでに遺跡自体は消滅しているといえる。

なお、石部氏が柿木字篠ヶ迫出土として紹介した蔵骨器は、昭和36年の調査カードでは焼骨のぎっしり詰まった状態で写真に写っているが、現在中学校にはなくなっている。その出土地は南之郷字篠ヶ迫で、小平遺跡とは隣接する地にある。

(2) 蔵骨器の形態

蔵骨器は須恵器の壺であり、口縁部が打ち欠かれているため残存高は20.5cmである。底は直径10.5cmと安定しており、胴部との境ははっきりと分かれている。最大直径は胴部上半にあり、直径17.0cmである。肩部は丸みをもってゆるやかに底部へと移っている。狭い輪積みあげによってつくられ、頸部も積みあげによって口縁部の立ちあがりへ移っている。整形は外面が長格子タタキであるが、これをヘラによってナデ消しており特に下半部ではタタキがほとんど残っていない。内面は横方向のナデ、底部もヘラナデで仕上げている。色調は淡茶褐色の土師質色彩を呈している。焼成度はふつうであるが、須恵器というより土師器に近い焼け具合を呈している。胎土は白色石粒・石英などを多く含む砂質土を用いているが、中には6mm大の石粒も含まれている。



小平遺跡出土の蔵骨器

4 川北の古石塔群(肝属郡吾平町下名字原之園)出土の蔵骨器

(1) 位置及び発見の経緯

肝属郡は古墳時代には高塚墳や地下式横穴の多く存在する所である。吾平町も地下式横穴が多い所で、最近では宮ノ上地下式横穴群、天神原地下式横穴群、堀木田原地下式横穴等で4基が発見、調査がなされている。

遺跡は吾平町の北端で鹿屋市、高山町との境界に近い所に位置し

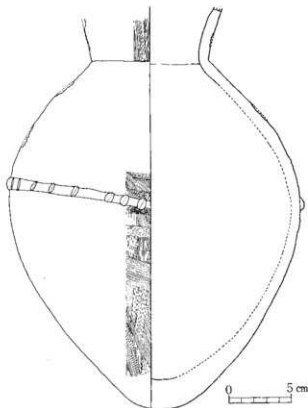


川北の古石塔群の位置

肝属川を眼下に見る南へのびる台地の先端部にある。周辺は宅地や道路によって削られており残存度は良くない。古石塔群は紺屋正文氏の宅地内にあり、以前よりその存在は知られていた。昭和58年4月に南九州古石塔研究会の町田満男氏や園田良賢氏らと、吾平町教育委員会によって調査され、同じ宅地内に移転された。^⑦ その際に五輪塔の下の中より当資料が出土したものの、その後、当資料は吾平町内にある寺の納骨堂に安置されていた。同年6月、中村が町教育委員会を訪れて当資料の出土を知った。その後これを借用して図化するとともに、中にはいていた人骨は長崎大学へ分析を依頼した。

(2) 蔵骨器の形態

蔵骨器は古墳時代の壺形土器である。口縁端部がわずかに欠けているが、ほぼ完形である。推定の口縁直径が12cm、推定の高さが32.5cmである。底部は丸底に近い小さな平底である。胴部の最大直径はほぼ中位にあり、23cmである。胴部中位には刻み目の施された断面半円形の貼り付け突帯が巡らされる。突帯は接合せずにすれ違って終る。肩部はやや外へ張っており、口縁部は外反



川北の古石塔群中より出土の蔵骨器（成川式土器）

きみに立ち上がる。器壁の剥脱が著しく調整痕がはっきりしないが、全面ハケナデ調整によるものと思われる。焼成は良好で、色調は暗茶褐色を呈する。胎土には石英、長石、角閃石、輝石粒等を含む。

5 考 察

(1) 曾於郡・肝属郡の蔵骨器

曾於郡は縄文時代の遺跡が多い所である。逆に肝属郡は弥生・古墳時代の遺跡が多い。これは両郡の立地条件の違いによる。すなわち曾於郡は内陸部に立地するため台地・山地が多く、肝属郡は海に面した部分、つまり河口付近につくられる沖積地が広いという違いである。

ところで古代の遺跡はどうかといえ、両郡ともに周知の遺跡は少ない。しかし、昨年曾於郡一帯の調査をしたところその数は少なくなかった。縄文時代遺跡のある所すべてに古代・中世の遺物があるといっても過言でない。大隅の直、加志君、肝衝といった豪族のいた所である。^⑧ この時期

の調査はこれからである。

現在までに知られている曾於郡と肝属郡の蔵骨器出土地名をあげると次のようになる。

	遺跡名	所在地	容器	蓋	人骨	備考	時代	文献
曾於郡	黒田 B	財部町下財部黒田	土師器壺	土師器杯	○		奈良	本書
	荒神免	末吉町南之郷荒神免	須恵器壺		○	人形		④
	篠ヶ迫	〃 〃 篠ヶ迫	〃 〃		○			注⑤
	小平	〃 〃 小平	〃 〃		○		平安	本書
	水ヶ迫	志布志町安楽水ヶ迫	〃 〃				奈良	注③
	山宮神社	〃 〃	甕白磁	〃			鎌倉	②
	牧野	〃 田之浦牧野				馬形・人形		注③
	鳥居段	大隅町大谷鳥井段	須恵器壺	軽石			平安	①
	双子塚	輝北町諏訪原双子塚	〃					注①
	後田	高山町後田	〃					注①
肝属	川北	吾平町下名原之園	古墳 壺		○		鎌倉	本書

(2) 黒田 B 例

本例のように土師器を用いた蔵骨器は加治屋（加世田市）、屋形原（川内市）^⑧、小川添・山下（菱刈町）^⑩、曲田（加治木町）^⑪の各遺跡でも出土が知られている。この中で、身・蓋とも壺であるのは加治屋、屋形原の例がある。小川添例は壺の上下に大形の鉢をかぶすものである。山下、曲田例は蓋がなくはっきりしない。山下例は焼骨も出ていないが、壺の底部付近と胴部に 2 ケ所穿孔してある。したがって黒田 B 遺跡のように蓋もあるのは本例が初めてである。特に身と蓋が同時に作られたようにビタリとあい、その焼成度・色調などが類似しているのは作られた当初から蔵骨器としての用途を目的としていたようである。

本県において古代における土師器壺の完形資料は少なく、細かな編年作業はまだされていないが、ひとつの傾向として長胴形から球形へという変化がみられる。球形のものはすでに平安時代前期頃にみられることから、本例のように長胴形に近い形のは奈良時代、降っても平安時代前期にとどまるだろう。ただ蓋の形態は、本県では須恵器に類似することが多い。そのことから考えれば、本例は奈良時代（8 世紀）のものとして間違ひなからうと思う。奈良時代のものとしては他に新山上横ノ丘（金峰町）^⑫、水ヶ迫（志布志町）^⑬の両遺跡でも出土している。

(3) 小平例

先に記したように県下では、32 遺跡で蔵骨器が出土している。その広がりはほぼ県下全域にわたっているが、これらの中には集中して存在する場所もある。その最たるものは大口市から菱刈町にまたがる大口盆地であり、ここには 7 ケ所 9 例が知られている。他にも万瀬川下流域の 4 ケ所、国分・隼人地区の 3 ケ所などに集中している。こうした地域は仏教文化が割合に早く受け入れられた地域だといえよう。

ところで、この南之郷地区にも半径 650 m の範囲のなかに 3 ケ所の蔵骨器出土地が知られている。

この地は古代には日向国諸県郡財部郷に属している。その後、平安時代の終り頃になって大隅国に編入され、深川院となる。当時、諸県郡は現在の鹿児島県に広くはいり込んでおり、現在の財部町・末吉町・大隅町・松山町・志布志町などを包括している。すなわち、曾於郡の蔵骨器出土地のうち双子塚を除いては当時諸県郡であった。諸県郡は大隅国と違って仏教文化と深いつながりがあったようである。すなわち、諸県郡であったからこそ、このような集中地域になったようである。

(4) 川北例

蔵骨器の発見された古石塔群では弘安11年(1288年)の紀年銘のある宝塔が確認されており、13世紀代を中心とする鎌倉時代の古石塔群ではないかと推察され、この蔵骨器の上にあった五輪塔も鎌倉時代のもと思われる。しかしながらこの蔵骨器は古墳時代中頃の産であり、時間的にかなりの隔りがある。伝世品ではないかとも考えられるが、800年前後の時期差があり伝世され得る可能性は非常に少ないと思われる。ただ、遺跡のすぐ南側を流れる肝属川の流域は弥生時代・古墳時代の遺跡が多い地域で、現在でも河川改修工事の時などに完形の土器が発見されることが良くある。この土器の器壁も水の作用によると思われる剥脱が著しいことなどから、肝属川の氾濫かなにかの作用で偶然に発見されたものを利用したのではないかということが考えられる。

この古石塔群については南九州古石塔研究会の会員である國田良賢氏によって考察がされているので、ここでは省略するが、この石塔群の近くにある末次城(吾平町)、富山城(高山町)等との関連が強いものと思われる。

6 さいごに

本論を書くにあたって多くの方々のお世話になった。最後になったが名前を列挙して厚くお礼を申しあげたい。牧野実夫氏・堀ノ内胤慶氏・集育穂氏・水流正信氏・水流幹夫氏・正本敏夫氏・板中春久氏・河野治雄氏・新東晃一氏

(注)

①新東晃一「鹿児島県出土蔵骨器地名表」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』1976.3

” 「隼人における共同体社会の崩壊期についてー大口盆地の仏教文化(蔵骨器)とその意義」『隼人文化』第2号 1976.7

②昭和53年8月に加世田市教育委員会で調査。

③昭和59年2月に菱刈町教育委員会で調査。

④池畑耕一・中村耕治「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』1984.3

⑤石部正志「大隅半島の骨蔵器」『古代学研究』15・16 1956.11

⑥鹿児島県教育委員会『鹿児島県遺跡地名表』1961.3

” 『鹿児島県市町村別遺跡地名表』1973.5

” 『昭和51年度鹿児島県市町村別遺跡地名表』1977.3 など

⑦國田良賢「佐多町島泊庵産仏・石塔ならびに吾平町川北の供養塔群の調査」『南九州の石塔』

4号(古石塔調査特集号(2)) 1984. 3

⑧中村明蔵『華人の橋』1978. 11

⑨新東晃一「川内市高城町字屋形原発見の蔵骨器」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』2
1976. 3

⑩菱刈町保管。

⑪加治木郷土誌編纂委員会『加治木郷土誌』1966. 3

⑫藤森栄一「奈良時代の火葬墓—蔵骨器の形態学的研究」『古代文化』第12巻第3号 1931. 3

⑬上村俊雄「古代及び中世の遺物」『志布志町誌上巻』1972. 3

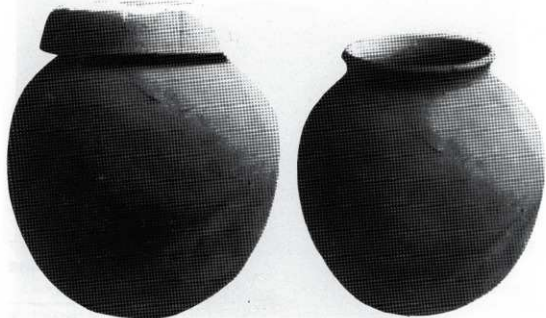
⑭高木秀吉『末吉郷土史』1957. 3

⑮小田富士雄「大隅山宮神社発見の蔵骨器」『志布志町誌上巻』1972. 3

⑯平田信芳・新東晃一「曾於郡大隅町鳥居段発見の蔵骨器」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』2 1976. 3



黒田B遺跡



黒田B遺跡出土の蔵骨器



小平遺跡



小平遺跡出土蔵骨器